

ノートル=ダム・ド・パリにおける装飾とポリクロミー

1. ヴィオレ=ル=デュックとノートル=ダム・ド・パリにおけるポリクロミー

アンヌ・ヴィユマール=ジェン (Anne Vuilleumard-Jenn)



19 世紀、中世への再評価から、建築から漆喰を取り剥がす際に再び陽の目を見ることとなった幾多のポリクロミーが注目されるようになった。古代神殿に観察されたポリクロミー同様に、これら中世の色彩は、新古典主義に

より広まった白さを理想とする考えを終わりにしたいという気持ちを人々のうちに引き起こした。ヴィオレ＝ル＝デュックはこうした色彩の再発見と、建築のポリクロミーをめぐる激しい議論において先駆的な役割を果たした。その著書『フランス中世建築事典』(*Dictionnaire raisonné de l'architecture française du XI^e au XVI^e siècle*, 1854-1868)の「絵画」の項目は、彼が修復工事の間に行ったサント・シャペルの壁面装飾についての研究に多くが割かれた。ヴィオレ＝ル＝デュックはそこで、新たなポリクロミーの創造に向けた合理的道筋を定めようとしたのである。彼の打ち立てた理論が、この問いをめぐる19世紀の最も深い思索であることは否定すべくもない。壁面装飾はその恩恵を受け、いっそう丁寧に保護されることとなった。ノートル＝ダム・ド・パリでは1856年、第二帝政時代の皇太子の洗礼式を機に外陣、トランセプト、内陣がポリクロミーで飾られた。これらは一時的な装飾として施されたに過ぎなかったが、当時は鮮やかに建物を彩ったことだろう。1864年以降、ヴィオレ＝ル＝デュックの監督下で全祭室に壁面装飾が施された。第二次世界大戦後、これらネオゴシックの壁画には全く関心が払われることなく、外陣と袖廊の祭室では全面的にとり除かれた。一方、内陣に位置するいくつかの祭室には残されたままである。1992年以降の修復工事により、ヴィオレ＝ル＝デュックがそれにより壁面装飾の魅力に人々の目を開かせることが出来ると考えた一連の壁画が再発見された。彼がこれらを重視したことは、1870年の著作『ノートル＝ダム・ド・パリの祭室壁画』(*Peintures murales des chapelles de Notre-Dame de Paris*)への力の注ぎようから理解できる。本書に添えられた着色石版刷り挿絵の色調は、同時期に施された壁面装飾に可能な限り近いものであるはずだ。

同様の装飾は、ヴィオレ＝ル＝デュックの手により修復された内陣障壁にも繰り返される。これらのポリクロミーは失われた尖塔について、ヴィオレ＝ル＝デュックのノートル＝ダム・ド・パリにおける仕事が修復家のものであると同時に、芸術家としてのそれであることを示す。長い間看過されてきた歴史主義の復権から、ノートルダムの歴史において極めて重要なこれらネオゴシックのポリクロミーに、わたしたちは新たな視線を投げかける。この脆くも崩れやすい文化遺産が火事の影響を少しでも免れてあることを願いたい。

参考文献：

Macé de Lépinay, F., « Les peintures murales », *Monumental, Dossier "Notre-Dame de Paris"*, 2000, p. 46-53.

Timbert, A., « Couleurs du passé, couleurs du présent. La polychromie d'architecture chez Viollet-le-Duc », *Anastasis*, vol. 3, n° 2 <http://anastasis-review.ro/wp-content/uploads/2017/03/III-2-Arnaud-Timbert-BDT.pdf>

Viollet-le-Duc, E.-E., *Dictionnaire raisonné de l'architecture française du XI^e au XVI^e siècle*, Paris, 1854-1868, t. 7, p. 56-109, article « Peinture ».

Viollet-le-Duc, E.-E., Ouradou, M. (relevées), *Peintures murales des chapelles de Notre-Dame de Paris*, Paris, 1870.
<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b105462094.r=viollet%20le%20duc%20ouradou?rk=21459;2>

オンライン公開日：2019年5月11日

(日本語訳 勝谷祐子)

2. 西ファサードのポリクロミー

アンヌ・ヴィユマール=ジェン (Anne Vuillemard-Jenn)



ノートル=ダム・ド・パリのファサードに施されたポリクロミーの存在は古くから知られる。1844年の『考古学紀要』(Annales archéologiques)には、15世紀末、とりどりの色彩と黄金に飾られた扉口彫刻の美しさを称えたエルズインジャンの司教マルティールについての短い物語が掲載された。19世紀を通じ、ポリクロミーの

痕跡についてはしばしば言及がなされ、中でもその関心で知られるヴィオレ＝ル＝デュックの発言が目立った。1963年に行われた《最後の審判》扉口の洗浄により彩色が確認されたが、さらに詳細な観察が行われるようになったのは、とりわけ西正面全体に施された1990年代の大々的な修復工事を経たことによる。三つの正面扉のポリクロミーの断片が、その数は僅かながらはっきりと姿を現した。かなりの部分を占めた金に加え、青、赤、緑、黄、黒が施されていたことが明らかとなった。色彩のコントラスト、あるいは審判を下すキリストの傷口に施されたヴァーミリオン等のハイライトにより、彫刻の図像構成がより明快に立ち現れるようにと考えられていたことが分かる。

三つの正面扉の上に位置する王のギャラリーは、ファサードに施されたポリクロミーのもう一つのハイライトであったに違いない。1977年ラ・ショッセ・ダンタン通りで、300を超える石像の断片が掘り起こされるという極めて重要な考古学上の発見がなされた。フランス革命の際に破壊された本ギャラリーの彫像、28体中21体の頭部がそこに含まれていた。彫刻家の手でしっかりと個性をもって表されたその顔には、各々の個性をさらに強調する彩色が残される。眼球に色が施され、瞼と眉毛が黒で引き立たせられることにより、王たち各々の表情の豊かさは、いっそう高められていた。明るい肌には繊細な諧調が与えられ、唇は赤で強調されており、頭髪と髭は微妙な濃淡をつけて表されていた。これらの彫像が施されたギャラリーそのものが鮮やかに色づけされていたことが、数々の研究によって明らかにされている。色彩のコントラストにより、割り形の凸面は、三つ葉型アーチあるいは柱頭の上にある地の部分からいっそうくっきりと立ち上がって見えていた。唯一そこに残された中世の柱からは、ギャラリー全体の華麗なる美を思わせる螺旋状モチーフが施されていたことが分かった。単色での色付けは表面を平坦化して見せる傾向があるが、交互に異なる色彩が施されたことにより、今日、遠目には感じ取ることの出来ない一定のリズムがもたらされていた。ヴィオレ＝ル＝デュックは西ファサードの薔薇窓と四つの壁龕、あるいは袖廊に位置する両ファサードにもポリクロミーを確認した。新たに行われる修復工事により、建築外部と内部における外装面ならびに装飾彫刻の仔細な観察が行われ、ノートル＝ダム・ド・パリの白壁の輝きにニュアンスを与えてきた色彩の痕跡がさらに発見されることであろう。

参考文献：

« Mélanges. Statuaire de Notre-Dame de Paris au XV^e siècle », *Annales archéologiques*, 1844, t. I, p. 56. <https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k203410s/f61.image>

Demailly, S., « L'étude de la polychromie de la façade occidentale de Notre-Dame de Paris », *Monumental, Dossier "Notre-Dame de Paris"*, 2000, p. 30-35. <http://www.lrmh.fr/IMG/pdf/mon-2000-30.pdf>

Erlande-Brandenburg, A., et Thibaudat, D., *Les Sculptures de Notre-Dame de Paris au musée de Cluny*, Paris, 1982.

Fonquernie, B., « Traces de la polychromie sur les portails et la galerie des Rois de Notre-Dame de Paris », in Verret, D. et Steyaert, D. (dir.), *La couleur et la pierre. Polychromie des portails gothiques*, actes du colloque d'Amiens, 2000, Paris, 2002, p. 119-128.

Viollet-le-Duc, E.-E., *Dictionnaire raisonné de l'architecture française du XI^e au XVI^e siècle*, Paris, 1854-1868, t. 7, p. 56-109, article « Peinture ». https://fr.wikisource.org/wiki/Dictionnaire_raisonné_de_l'architecture_française_du_XIe_a_u_XVIe_siè

[cle/Peinture](#)

Vuillemard-Jenn, A., « La polychromie des façades gothiques et sa place au sein d'un dispositif visuel », *Histoire de l'art*, 2013, 72, p. 43-55.

オンライン公開日 : 2019 年 6 月 13 日

(日本語訳 勝谷祐子)